# 私たちらしい農業を

Iターン農業女子

PROFILE
村西（むらにし） 有希（ゆうき）さん
ナス農家　就農歴2年（富岡市）

千葉県我孫子市出身。地縁のない富岡市で農業を本格的にスタートさせたのは2015年4月から。現在、1歳6ヵ月の愛娘を育てながら、夫婦二人三脚でナス、キュウリやインゲン豆、キャベツなどを生産。

## 等身大の生活が送れる農業は私たち家族にとって宝物

### 二人にとって就農は学生時代からの夢

縁もゆかりもない群馬県の富岡市で農業を始めた有希さん。JICA（青年海外協力隊）での経験と当時お付き合いしていた夫・真典さんが農業を希望したことがキッカケでした。

JICAに入隊したのは、途上国と農業の関係に興味を持ったことから。水も電気もない中で自然に寄り添った暮らしを体験してみたかったという。また、日本大学の農学部に在籍していたため、そもそも野菜や農業が好きだったそうです。JICAでは2年間、セネガル共和国に派遣され、野菜隊員として学校給食や学校菜園をつくるプロジェクトに参加していました。では、なぜ就農場所が地元を遠く離れた富岡市かと言うと、セネガルに出向く前の半年間、隊員は野菜研修を行います。その研修先が富岡市にある農家だったという。真典さんもほぼ同時期に、富岡市で野菜研修を行い、有希さんと同じセネガル共和国に派遣されました。

帰国後、NPO法人にて6次産業について学び、野菜の栽培、加工、販売に携わりました。そして、一度地元に戻り、薬用植物の研究所で勤務を開始。この時、真典さんは一足先に富岡市で就農をしていました。「いずれは結婚して、私も就農する考えでいたので、それまでの間は農業に役立つ知識を十分に身に付けようと思っていました」と有希さん。薬用植物の研究所では薬用植物のスクリーニング事業に携わり、薬用植物の栽培知識や薬用成分について学んだという。その後、2014年の結婚、2015年に移住。ご主人が居たとは言え、地元を離れて就農することに不安はなかったのか有希さんに尋ねると「まったく不安はなかったですね。JICAの研修時代にお世話になった農家さんがとても良い方で、当時『ここで農業するなら面倒みてやる！』と言ってくれた一言が心強かったですね。私も主人も。私たちにとって富岡市は第二の故郷みたいなところです」と屈託の